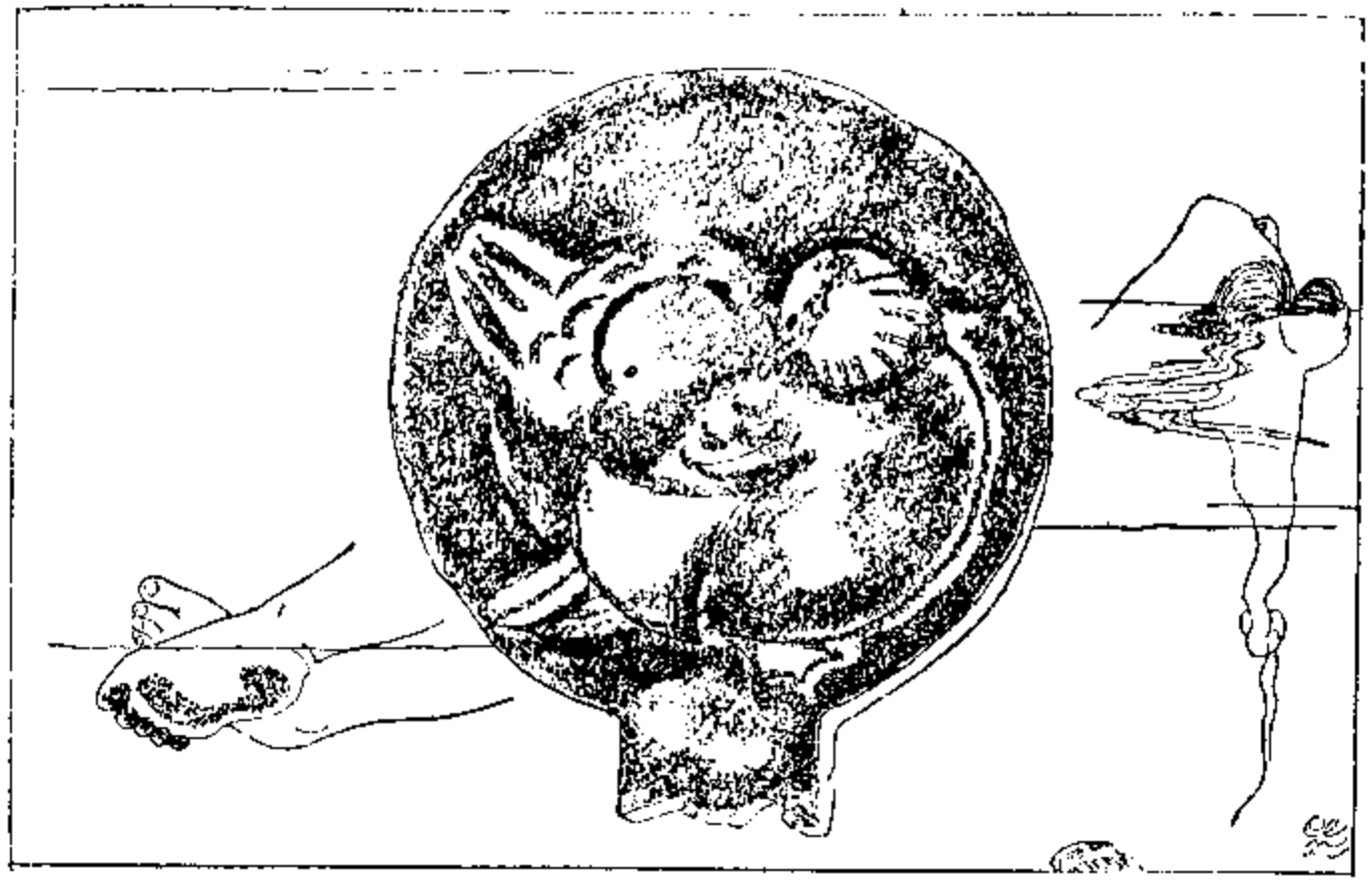


鴛鴦鏡

岡本綺堂



「君は語る。これは明治の末年、わたしが東北のある小さい町の警察署に勤めてゐた時の出来事と御承知ください。一體それは探偵談といふべきものか、怪談といふべきものか、自分にもよく判らない。今日の流行詞でいへば、或は怪奇探偵談とでも云ふべき部類のものであるかも知れない。」

地方には今も往々見ることであるが、こゝらも曆が新舊ともに行はれてゐて、盆や正月の場合にも町方では新曆による。在方では舊曆によると云ふ風習になつてゐるので、今この事件の起つた正月の下旬も在方では舊正月を眼の前に控へてゐる忙がしい時であつた。例年に比べると雪の少ない年ではあつたが、それでも地面が白く凍つてゐることは云ふまでもない。

夜の十一時頃に、わたし達は町と村との堺にある辨天の祠のそばを

通つた。常夜は非番で、村のある家の俳句會に出席した歸り路である。連れの人々には途中で別れてしまつて、町の方角へ向つて歸つて来るのは、町の呉服屋の息子で俳句を野童といふ青年と私との二人ぎりであつた。月はないが、星の明るい夜で、土地に馴れてゐる私達にも、夜更けの寒い空氣はかなりに鋭く感じられた。今夜の撰句の噂なども仕盡して、ふたりは黙つて俯向いて歩いてゐると、野童は突然にわたしの外套の袖をひいた。

「矢田さん。」

「あそこは何かあるやうですね。」

わたしは教へられた方角を透して視ると、そこには小さい辨天の祠が暗いなりに立つてゐた。むかしは祠のほとりに湖水のやうな大きい池があつたと云ひ傳へられてゐるが、その池もいつの代にかだんぐに埋められて、今は二三百坪になつて仕舞つたが、それでも相當に深いといふ噂であつた。狭い境内には杉や椿の古木もあるが、そのなかで最も眼に立つのは池の岸に垂れてゐる二本の柳の大樹で、この柳の青い陰があるために、春から秋にかけては辨天の祠のありかが遠方からも明かに望み見られた。その柳も今は獲せてゐる。その下に何物かが潜んでゐるらしいのである。

「乞食かな。」と、わたしは云つた。

「焚火をして火事でも出されると困りますね。」と、野童は云つた。

去年の冬も乞食の焚火のために、村の山王の祠を焼かれたことがあるので、私は一應見とける必要があると思つて、野童と一緒に小さい石橋をわたつて境内へ進み入ると、こゝには堂守などの住む家もなく、唯わづかに社前の常夜燈の光ひとつを頼りであるが、その灯も今夜は消えてゐるので、わたし達は暗い木立のあひだを探るやうにして辿つて行くのほかは無かつた。

足音を忍ばせて段々に近寄ると、池の岸にひとつの黒い影の動いてゐるのが、水明りと雪明りと星明りとで朧けに窺はれた。その影はうづくまるやうに俯向いて、凍つた雪をかいでゐるらしい。獣ではない、確に人である。私服を着てゐるが、わたしも警察官であるから、進み寄つて聲をかけた。

「おい。そこに何をしてゐるのだ。」

相手はなんの返事も無しに、摺りぬけて立去らうとするらしいので、私は追ひかけて、その行く手に立ち塞がつた。野童も外套の袖をはねあけて、素破といへば私の加勢をするべく身構へしてゐると、相手はむやみに逃げるのも不利益だと覺つたらしく、無言でそこに立ちどまつた。

「おい、黙つてゐては判らない。君は土地の者かね。」
「はい。」
「こゝに何をしてゐたのだ。」

「はい。」
その聲と様子とで、野童は早くも気が注いだらしい。一足摺寄つて呼びかけた。

「君は……。冬坡君ぢやないか。」

さう云はれて、わたしも気が注いだ。彼は町の烟草屋の息子で、雅號を冬坡といふ青年であるらしかつた。冬坡も我々の俳句仲間であるが、今夜の句會には缺席して、こんなところに来てゐたのである。さう判ると、わたし達も聊か拍子抜けの氣味であつた。

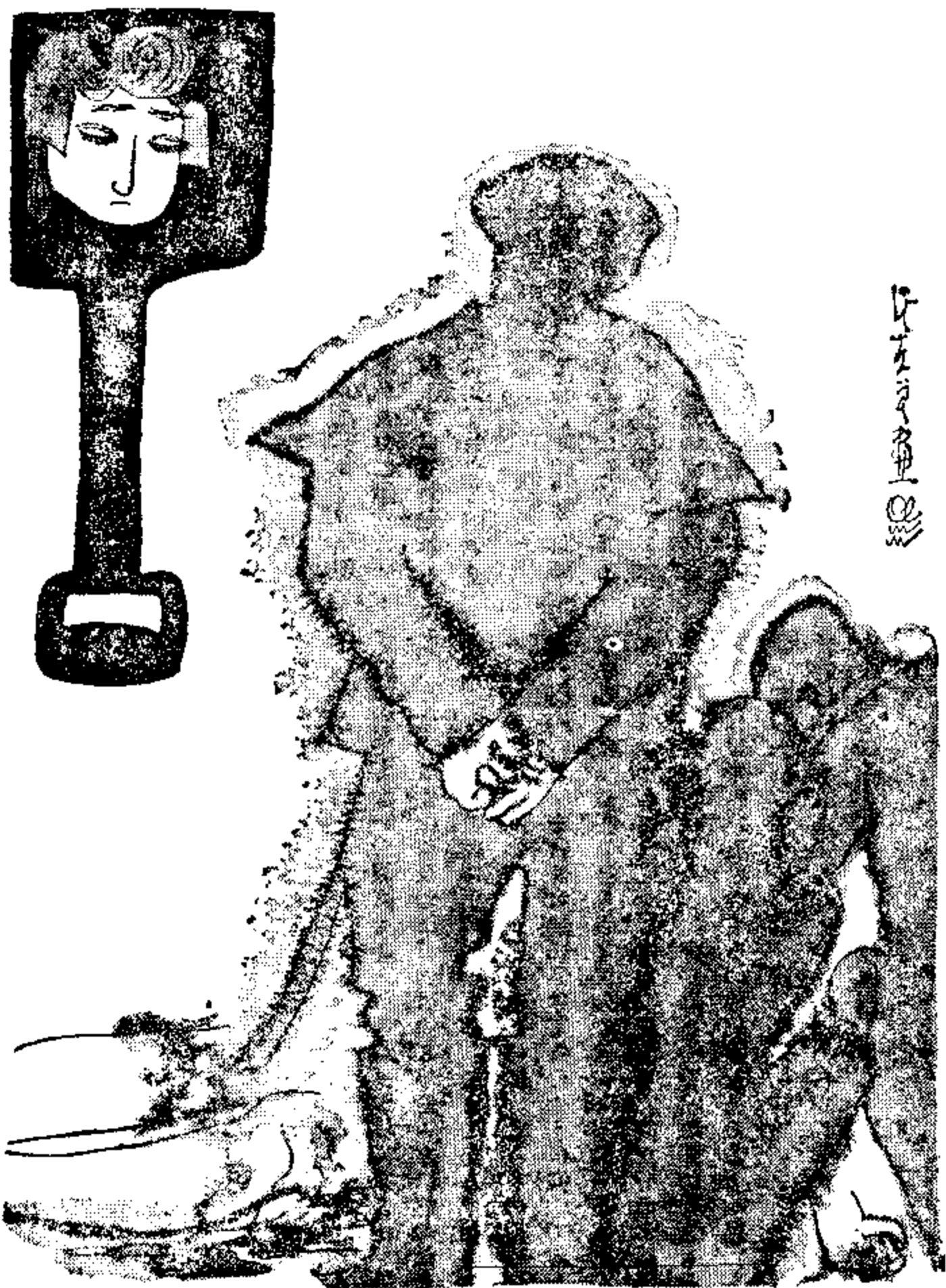
「む、冬坡君か。」と、わたしも云つた。「今頃こんなところへ何しに来てゐたのだ。夜詣りでもあるまい。」

「いや、夜まゐりかも知れませんが。」と、野童は笑つた。「冬坡君は辨天さまへ夜参りをするやうな癖があるんですから。」
なんにしても其正體が冬坡と判つた以上、私もむづかしい詮議も出来なくなつたので、三人が後や先になつて境内をあるき出した。野童は今夜の會の話などをして聞かせたが、冬坡はことば寡なに挨拶するばかりで、身にしみても聽いてゐないらしかつた。わたしの家は町はずれで、他のふたりは町

のまん中に住んでゐるので、私が一番先に彼等と別れを告げなければならなかつた。

二人に挨拶して自分の家へ歸つたが、冬坡の今夜の舉動がどうも私の腑に落ちなかつた。野童は何も彼も呑み込んでゐるやうなことを云つてゐたが、なんの仔細があつて彼はこの寒い夜ふけに辨天の祠へ行つて、池のほとりにさまよつてゐたのであらう。併し冬坡が此頃こゝらにも流行する不良青年の徒でないことは、わたしも平生からよく知つてゐるので、彼が何等かの犯罪事件に關係があらうとも思はれない。したがつて、私も深く注意すること無しに眠つてしまつた。

そのあくる日は朝から出勤してゐたので、わたしは野童にも冬坡にも逢ふ機会がなかつた。すると、次の日の午前九時頃になつて、一つの事件が彼の辨天池のほとりに起つた。町の清月亭といふ料理屋の娘の死體が池のなかから発見されたのである。娘はお照と云つて、年は十九、色も白く、髪も黒く、容貌も悪くないのであるが、惜いことには生まれながらに左の足がすこし短いので、いはゆる跛足といふ程でもないが、歩く格好はどうも直しくない。殊にさういふ商賣屋の娘であるから、當人も平生からひどくそれを苦にしてゐたらしい。だんく、年頃になるに連れて、その苦がいよゝゝ重つて來たらしく、この足が満足になるならば私は十年ぐらゐの壽



冬坡君の足

命を縮めても好いなどと、先ごろ或人に語つたといふ時もある。それらの願掛けの爲か、或は他に仔細があるのか知らないが、お照は正月の七草頃から辨天さまへ日参をはじめた。それも其中は人の眼に立つのを厭つて、日の暮れるのを待つて参詣するのを例としてゐた。料理屋商賣としては、これから忙がしくならうといふ灯ともし頃に出てゆくのは、少し不似合のやうではあるが、彼女はひとり娘である上に、現在女親ばかりで随分甘やかして育てゐるのと、もと／＼狭い土地であるから、辨天の祠まで往復十町あまりに過ぎないで、さのみの時間をも要しないが爲に、母も別に彼れ是れも云はなかつたらしい。お照は昨夜も参詣に出て行つて、かうした最期を遂げたのである。

清月亭は宵から三組ほどの客が落合つてゐたので、それに紛れて初めのうちは氣も附かなかつたが、八時頃になつても娘が歸つて来ないので、母もすこしく不安を感じ出して、念のため雇人を見せに遣ると、辨天社内にお照のすがたは見えないと云つて、一旦はむなしく歸つて来た。いよく不安になつて、心當りを二三軒聞きあはせた後に、今度は母が雇人を連れて再び辨天の祠へ探しに行つたが、娘の影はやはり見當らなかつた。彼女の死體はあくる朝になつて初めて発見されたのであつた。

もしお照が自殺であるとするれば、彼女は投身の目的で岸から飛び込んだが、氷が厚いので目的を達しがたく、單に額を傷けたに止まつたので、更に這ひ起きて真中まで進んで行つて、氷の薄いところを探んで再び投身したものと、察せられる。しかし困つたことには、私たちの出張するのを待たずして、早く死體を引揚げてしまつた爲に、氷の上は大勢に踏み荒らされて、泥草鞋などの跡が亂れてゐるので、その當時の状況を判断するに就て甚だしい不便を與へるのであつた。

この時、わたしの注意をひいたのは、岸に垂れてゐる二本の枯柳の大樹の根下が二つながら掘り返されてゐることである。更に檢めると、一本の根下の土は乾いてゐる。他の一本の根下の土はまだ乾かないで、新しく掘り返されたやうに見える。私はそこらに集まつてゐる土地の者に訊いた。

「この柳の下はどうしてこんなに掘つてあるかね。」

「いづれも顔をみあはせてゐるばかりで、進んで返事をする者はなかつた。誰も今まで氣が注かなかつたと云ふのである。わたしは岸に近い氷の上に降り立つて、再びそこらを見まはすと、凍り着いてゐる疎な枯蘆のあひだに、圍藝用かとも思はれるやうな小さいスコップを發見した。スコップには泥や雪が凍つてゐた。

何者ががこのスコップを用ゐて、柳の下を掘つたのであら

その訴へに接して、わたしは一人の巡查と共に現場へ出張して、型のごとくに其死體を檢視することになつた。池は南に向つて日あたりの好いところにあるが、それでもこのことであるから、岸のあたりは可なりに厚く凍つてゐる。お照の死體は池のまん中に浮んでゐたと云ふのであるが、私たちの出張したときには、もう岸の上に引揚げられて、所詮無駄とは知りながら薬火などで温められてゐた。

この場合、他殺か自殺かを決するのが第一の問題であること云ふまでもない。醫師もあとから駆けつけて来たが、誰の眼にもすぐに疑はれるのは、お照の額のや、左に寄つたところに、生々しい打疵の痕が残つてゐることである。而もそれを以て一圖に他殺の證據と認め難いのは、こゝらの池や川は氷が厚いので、それが自然に裂けて劍のやうに尖つてゐる所もある。或は自然に凸起して岩のやうに突き出てる所もある。それがために自殺を目的の投身者も、往々その氷に觸れて顔や手足を傷けてゐる場合があるので、お照の死體もその額の疵だけで他殺と速断するのは危険であることを私たちも考へなければならなかつた。殊に醫師の檢案によると、死體は相當に水を飲んでゐるといふのであるから、他殺の死體を水中へ投げ込んだといふ疑ひはいよく薄くなるわけである。

う。さう思つた一利刑、彼の冬坡のすがたが私の眼さきに閃いた。かれは一昨日の晩、この柳の下にうづくまつて、凍つた雪を掻いてゐたのである。

二

お照の死體は清月亭の親許へ引渡された。種々の状況を綜合して考へると、大體に於て自殺説が有力であつた。彼女は自分が跛足に近いのを近頃著しく悲觀してゐたと云ふ事實がある以上、若い女の思ひつめて、遂に自殺を企てたものと認めるのが正當であるらしかつた。もう一つ、清月亭の女中達の申立てによると、その相手は誰であるか判らないが、お照は近來なにかの戀愛關係を生じて、それがための人知れず煩悶してゐたらしいと云ふのである。さうなると、自殺の疑ひがいよく濃厚になつて来て、不具者の戀、それが彼女を死の手へ引渡したものと認められて、警察側でも深く踏み込んで詮議するのを見合はせるやうになつた。

冬坡は何のために柳の下を掘つてゐたのか。又それがお照の死と何かの關係があるのか無いのか。それらのことは容易に判断が附かなかつたが、わたしは警部といふ職務の表、一應は冬坡を取調べるのが當然であると考へてゐると、恰もそ

の日の夕方に、町の裏通りで冬坡に出逢つた。

そこは東源寺といふ寺の横手で、玉椿の生垣のなかには雪に埋もれた墓場が白く見えて、ところ／＼に大きい杉が立つてゐた。ゆふぐれの寒い風はその梢をさば／＼と揺つて、どこかで鴉の啼く聲もきこえた。冬坡はわたしの来るのを知つてゐるのか知らないのか、俯向き勝に摺れちがつて行き過ぎようとするのを、わたしは小聲で呼びかへした。

「冬坡君。どこへ行くのだ。」

彼は停めたやうに立停まつて、無言でわたしに挨拶した。

冬坡は平生から濶良の青年である。殊にわたしの俳句友達である。彼に對して職權を示さうなどは勿論考へてゐないの

で、わたしは個人的に打解けて訊いた。

「君は一昨日の晩、あの辨天池のところを何をしてゐたのかね。」

彼はだまつてゐた。

「君はスコープで何か掘つてゐたのぢやないかな。」と、わたしは覺みかけて訊いた。

「いゝえ。」

「では、夜更けにあそこへ行つて、何をしてゐたのかな。」

彼は又黙つてしまつた。

「君はゆゑもあの池へ行つたかね。」

「いゝえ。」

「なんでも正直に云つてくれないと困る。さもないと、わたしは職務上、君を引致しなければならぬことになる。それは私も好まないことであるから、正直に話してくれ給へ。ゆゑは兎もあれ、一昨日の晩は何をしに行つたのだね。」

冬坡はやはり黙つてゐるのである。かうなると、わたしも少しく語氣を改めなければならなくなつた。

「君はふだんに似合はず、ひどく強情だな。隠してゐると、君の爲にならないぜ。實は警察の方では、清月亭のむすめを他殺と認めて、君にも疑ひをかけてゐるのだ。」と、わたしは嚇すやうに云つた。

「さうかも知れませんが」とかれは、低い聲で獨り言のやうに云つた。

「それぢやあ君は何か疑はれるやうな覺えがあるのかな。」

云ひかけて私はふと見かへると、折れ曲つた生垣の角から一人の女の顔がみえた。女は顔だけをあらはして、こちらを窺つてゐるらしかつた。もう暮れかゝつてゐるので、その人相はよく判らないが、ゆふ闇のなかにも薄白く浮んでゐる彼女の顔が、どうも堅氣の女ではないらしい。わたしはさう直覺しながら、更によく見定めようとする時、不意にむつといふ聲がきこえた。何者かが後ろから彼女を嚇したのである。

つゝいて若い男の笑ひ聲がきこえて、角から現れ出たのは野童であつた。

彼等とわたし達との距離は四五間に過ぎないのであるから、この悪戯騒ぎのために、今まで隠されてゐた女の姿も自然にわたしの眼先へ押出された。女はコートを着て、襟巻に顔の半分を深く埋めてゐたが、それが町の藝妓であるらしいことは大抵察せられた。野童の家はこの町でも大きい店で、彼も相當に道樂をするらしいから、豫てこの藝妓を識つてゐるのであらう。さう思つてゐるうちに、野童の方でもわたし達の姿をみつけて、早速に進み寄つて來た。

「今晚は……やあ、冬坡君もゐたのか。」

さうは云つたものゝ、彼は俄に口を噤んで、わたし達の顔をぢつと眺めてゐた。普通の立話以外に何かの仔細があるらしいことを、彼もすぐに覺つたらしい。飛んだ邪魔者が來たとは思つたが、わたしも笑ひながら挨拶した。

「君と今ふざけてゐたのは誰だね。」

「え、あれは……」と、野童は冬坡の顔をみながら再び口を噤んだ。

「あ、それぢやあ冬坡君のおなじみかね。」

わたしは再び見かへると、女の姿はいつの間にか消えてしまつて、あたりを包む夕闇の色はいよ／＼深く迫つて來た。

野童は一昨日の晩わたしに向つて、冬坡君は辨天池まへ夜參りをする譯があると云つた。してみると、彼は冬坡について何かの秘密を知つてゐるらしい。その秘密は彼の藝妓に關聯することではあるまいか。併しそれだけのことならば、いかに内氣の青年であると云つても、冬坡が堅く秘密を守るほどの事もあるまい。いづれにしても、野童と冬坡とは別々に取調べる必要がある。ふたりが鼻を突き合はせてゐるは、その取調べに不便があると思つたので、わたしはこゝで一先づ冬坡を手放すことにした。

二つ三つ冗談を云つて、わたしはそのまゝ行きかけると、野童は曲り角まで追つて來て、そつと訊いた。

「あなたは今、冬坡君を何か調べておいでになつたのですか。」

「む、すこし訊きたいことがあつて……。君にも訊きたいことがあるのだが、今夜わたしの家へ來てくれないか。」

「まゐります。」

わたしは家へ歸つて風呂に這入つて、ゆふ飯を食つてしまつたが、野童はまだ來なかつた。そのうちに細かい雪が降り出して來たと、家内の者が云つた。この春はこゝろに珍しいほど降らなかつたのであるから、もう降り出す頃であらうと思ひながら、薄暗い電燈の下で炬燵に這入つてゐると、外の

雪は音も無しに降りつけてるらしかった。
 九時過ぎになつて、野童が来た。いつもは遠慮無しに炬燵に這入つて差向ひになるのであるが、今夜はなんだか固くなつて、平生よりも行儀よく坐つてゐた。炬燵に這入れと勧めても、彼は躊躇してゐるらしいので、わたしは妾に云ひつけて、彼に手あぶりの火鉢をあたへさせた。

「たうとう降り出したやうだな。」と、わたしは云つた。
 「降つて来ました。今度はちつと積るでせう。」

「さつきの藝妓はなんと云ふ女だね。」
 野童は暗い顔をいよ／＼暗くして答へた。

「染吉です。」
 「あ、染吉か。」と、わたしは廿三四の、色の白い、眉の力んだ、右の眼尻に大きい黒子のある女の顔をあたまに描いた。

「それに就て、今夜出ましたのですが……。」と、野童は左右へ氣配りするやうに聲をひそめて云ひ出した。「あなたは何で冬坡君をお調べになつたのでせうか。」

わたしはすぐには答へないで、相手の顔を睨むやうに見つめてゐると、彼は恐れるやうに少し猶豫つてゐたが、やがて小聲で又云ひつけた。
 「さつき寺の横手で、あなたにお目にかつた時に、どうも

何だか可憐いと思ひまして、あれから冬坡をある所へ連れて行つて、色々詮議をしますと、最初は黙つてゐて、なかなか口を開かなかつたのですが、わたたくしがだん／＼説得しましたので、たうとう何も彼も白状しました。」
 「白状……。なにを白状したのかね。あの男がやつぱり清月亭のむすめを殺したのか。」と、わたしはもう大抵のことを心得てゐるやうな顔をして、探りを入れた。

「まあ、お聞きください。御承知の通り、冬坡はおふくろと弟と三人暮りで、大して都合が好いと云ふわけでもなく、殊におとなしい性質の男ですから、自分から進んで花柳界へ踏み込むやうなことは無かつたのですが、商賈が煙草屋で、花柳界に近いところがあるので、藝妓や料理屋の女中達はみんな冬坡の店へ煙草を買ひに行きます。冬坡はおとなしい上に男振りも好いので、浮氣っぽい花柳界にはなかく／＼人氣があつて、些つとぐらゐる遠いところにもゐる者でも、わざ／＼廻り路をして冬坡の店へ買ひに来るやうな譯でしたが、そのなかでも彼の染吉が大熱心で、どういふ風に誘ひかけたのかわりませんが、去年の秋祭の頃から冬坡と關係を附けて仕舞つたのださうです。染吉もなかく／＼罔口な女ですし、冬坡はおとなしい男なので、二人の秘密はよほど嚴重に守られて、今まで誰にも覺られなかつたのです。わたたくしも些つとも知り



冬坡君と染吉

ませんでした。いや、まったく知らなかつたのです。」
或は薄々知つてゐたのかも知れないが、この場合、彼としては先づかう云ふのほかはあるまいと思ひながら、わたしは黙つて聞いてゐた。

二二

外の雪には風がまじつて來たらしく、窓の戸を時々によする音がきこえた。雪や風には馴れてゐる筈の野童が、今夜はなんだかそれを氣にするやうに、幾たびか見返りながら又語りつゝけた。

「そのうちに、又ひとりの競争者があらはれて來ました。と申したら、大抵御推量も附きませうが、それは彼の清月亭のお照で、勿論染吉との關係を知らないで、だん／＼に冬坡の方へ接近して來て、これも去年の冬頃から關係が出來てしまつたのです。かう云ふと、冬坡は甚だ不しだらこのやうにも聞えますが、何分にもあゝ云ふ氣の弱い男ですから、女の方から眼の色を變へて強く迫つて來られると、それを拂ひ退けるだけの勇氣がないので、どつちにも義理が悪いと思ひながら兩方の女に引摺られて、まあする／＼に其日其日を送つてゐたと云ふわけです。併しそれがいつまでも無事に済む筈がありません。去年の暮に、冬坡のおふくろが風邪をひいて、冬

至の日から廿六七日頃まで一週間ほど寝込んだことがありません。そのときに染吉とお照とが見舞に來て……。どちらも菓子折か何かを持つて來て、しかも同時に落合つたものですから、甚だ工合の悪いことになつて仕舞ひました。どうも一通りの見舞ではないらしいと染吉も睨む、お照も睨む。双方睨み合ひで、そのときは何事もなく別れたのですが、二人の女の胸のなかに青い火や紅い火が一度に燃えあがつたのは判り切つたことです。

そこで、人間はまあ五分五分としても、お照の方が年も若し、おまけに相當の料理屋の娘といふのですから、この方に強味があるわけですが、困つたことには片足が短い、まあ一種の片輪者と云つたやうなものですから、斯ういふ場合にはそれが非常な弱味になります。又、染吉は冬坡よりも二つの年上であると云ふのが第一の弱味である上に、競争の相手は自分の出先の清月亭の娘といふのですから、商賣上の弱味もあります。そんなわけで、どちらにも色々の弱味があるだけに、餘計に修羅を燃やすやうにもなつて、その競争が激烈といふか、深刻といふか、他人には想像の出來ないやうな物激しいものになつて來たらしいのです。併し何分にも暮から正月にかけては、料理屋も藝妓も商賣の忙がしいのに追はれて、男の問題にばかり、係り合つてもゐられなかつたのですが、

正月ももう半過ぎになつて、お正月氣分もだん／＼に薄れて來ると、この問題の火の手がまた熾になりました。染吉もお照も暇さへあれば冬坡をよび出して、恨みを云つたり愚痴を云つたりして、滅茶滅茶に男を小突きまはしてゐたらしいのです。この春になつてから、冬坡が兎かくに句會を負け勝であつたのも、そんな捫着の爲であつたと云ふことが今判りました。

「併し君は一昨日の晩、冬坡君は夜参りをする譯があると云つたね。」と、わたしはやや皮肉らしく微笑した。

野童はすこし慌てたやうに詞を途切らせた。なんと云つても、彼は已に冬坡の秘密を知つてゐたに相違ないのである。併しこゝで詰まらない揚足を取つてゐて、肝腎の本題が横道へ外れてはならないと思つたので、わたしは笑ひながら又云つた。

「そこで、結局どう云ふことになつたのだね。」

「染吉とお照は一方に冬坡を窘めながら、一方には神信心をはじめました。殊にあゝいふ社會の女達ですから、毎晩彼の辨天さまへ夜参りをして、戀の勝利を祈つてゐたのです。そのうちに誰が教へたのか知りませんが、辨天さまは嫉妬深いから、そんな願掛けは肯いてくれなればかりか、却つて祟がある」と云つたので、染吉はこの廿日頃から夜参りをやめまし

た。お照も廿三四日頃から矢はり参詣を見合はせたさうです。すると、この廿五日の巳の日の晩に、二人がおなじ夢を見たのです。」

「夢をみた……。」

「それが實に不思議だと冬坡も云つてゐました。」と、野童自身も不思議さうに云つた。「それが二人ながら些つとも違はないのです。辨天さまが染吉とお照の枕元へあらはれて、境内の柳の下を掘つてみる。そこには古い鏡が埋まつてゐる。それを掘り出したものは自分の顔が叶ふのだといふお告があつたさうです。そこで、明くる晩、染吉はお座敷の歸りに冬坡をよび出して、これから一緒に辨天さまへ行つてくれと無理に境内へ連れ込んで、一本の柳の下を掘つてゐるところへ、あなたとわたくしが來かゝつたので、染吉はあわて、祠のうしろへ隠れてしまつて、冬坡だけが我々に見つけられたのです。常夜燈を消して置いたのも染吉の仕業で、何分あたりが暗いので、そこに染吉の隠れてゐることは一向氣が付きませんでした。我々が立去つたあとで、染吉は再び掘らうとしたのですが、冬坡がスコップを持つて行つてしまつたので、仕方が無しに歸つて來たさうです。」

「お照は掘りに來なかつたのだね。」

「お照がなぜすぐに來なかつたのか、その仔細はわかりませ



ひかりのあかり

ん。前賣が商賣ですから、その晩はどうしても出られなかつたのかも知れませんが。それでも次の日、すなはち昨日の夕方に冬坡を呼び出して、やはり一緒に行つてくれと云つたさうですが、冬坡はゆうべに懲りてゐるので、夢なんぞは當てになるものではないから止めた方がいゝと云つて、たうとう断つてしまひました。それでもお照は思ひ切れないで、自分ひとりで辨天の祠へ行つて、二本目の柳の下から鏡をほり出したのです。」

「鏡……。ほんたうに鏡が埋められてゐたのか。」と、わたしは炬燵の上から身體を乗り出して訊いた。

「まつたく古い鏡が出たのだから不思議です。」と、彼は小聲に力を籠めて云つた。「お照がそれを掘り出したところへ、染吉があとから來ました。染吉もまだ思ひ切れないので、今夜は日の暮れるのを待ちかねて、二本目の柳の下を掘りに來ると、お照がもう先廻りをしてゐるので驚きました。どちらも明らさまに口へ出して云へることはありませんから、お互ひにまあ好加減な挨拶などをしてゐるうちに、お照が何か鏡のやうなものを袖の下に隠してゐるのを、常夜燈のひかりで染吉が見つけたのです。お照も早く常夜燈を消して置けば好かつたのでせうが、年が若いだけにそれ程の注意が行きと、かなかつたので、忽ち相手に見付けられて仕舞つたのです。」

一方のお照が死んでゐるので、詳しいことは判りませんが、染吉はそれを見せろと云ひ、お照は見せないといふ。日は暮れてゐる、あたりに人は無し、もう斯うなれば仇同士の喧嘩になるより外はありません。なんと云つても、染吉の方が年上ですし、お照は足が不自由といふ弱味もあるので、その鏡をたうとう染吉に奪ひ取られました。それを取返さうと獅嚙み付くと、染吉ももう逆上せてゐるので、持つてゐる鏡で相手の額を力まかせに殴りつけた上に、池のなかへ突き落して逃げました。」

お照の額の疵は氷の爲ではなかつた。たとひ氷でないとしても、それが鏡のたぐひであらうとは、わたしも少しく意外であつた。

「たゞ突き落して逃げたのだね。」と、わたしは念を押した。「染吉はさう云つてゐるさうです。御承知の通り、岸の氷は厚いのですから、たゞ突き落しただけでは溺死する筈はありません。まん中の邊まで引摺つて行つて突き落すか。それとも染吉が立去つたあとで、お照は水でも飲む積りで真中まで這ひ出して行つて、氷が薄いために思はず滑り込んだのか。或は大切の鏡を奪ひ取られた爲に、一圖に悲觀して自殺する氣になつたのか。それらの事情はよく判らないのですが、いづれにしても自分がお照を殺したも同然だと云つて、染吉は

「覺悟してゐるさうです。」

「覺悟してゐる……。それでは自分する積りかね。」
「それが困るのです。」と、野童は顔をしかめた。「自分でもさう覺悟をしてゐながら、やはり女の未練で、けふも冬坡を寺の墓地へよび出して、これから一緒に北海道へ逃げてくれと頼りに口説いてゐるのです。」

「冬坡はどこにゐるね。」
「今はわたくしの家の奥座敷に置いてあるのです。うつかりした所にあると、染吉が附纏つて来て何をするか判りませんから。」

「よろしい。それではすぐに女を引擧げることによしよう。君の留守に、冬坡が又ぬけ出しでもすると困るから、早く歸つて保護してゐてくれ給へ。」

野童を先に歸して、わたしはすぐに官服に着かへて出ると、表はもう眼も明けないやうな吹雪になつてゐた。署へ行つて染吉を引致の手續きをする、彼女は午後から一度も抱へ主の家へ歸らないと云ふのであつた。停車場へ聞きあはせに遣つたが、彼女が汽車に乗込んだやうな形跡はなかつた。

もしかと思つて、辨天社内を調べさせると、恰もお照とおなじやうに、その死體は池の中から發見された。雪と水とに濡れてゐる染吉の懷ろには、古い鏡を大事さうに抱いてゐ

た。冬坡を連れて逃げる望みも無いとあきらめて、彼女はここを死場所にしたのであらう。お照がみづから滑り込んだのであれば勿論、たとひ染吉が引摺り込んだとしても、事情が事情であるから死刑にはなるまい。而も彼女は思ひ切つて戀のかたきの跡を追つたのである。

鏡は青銅で作られて、その裏には一雙の鴛鴦が彫つてあつた。鑑定家の説によると、これは支那から渡來したもので、おそらく漢の時代の製作であらうと云ふことであつた。漢といへば殆ど二千年の昔である。そんな古い物がいつの代に渡つて来て、こんなところに何うして埋められてゐたのか勿論判らない。更に不思議なのは、染吉もお照もおなじ夢を見せられて、その鏡のために同じ終りを遂げたことである。辨天さまに對して戀の願掛けなどをした爲に、そんな祟を蒙つたのであらうと、花柳界の者は怖ろしさうに語り傳へてゐた。

實際わたし達にもその理窟が判らないのであるから、迷信ぶかい花柳界の人々がそんなことを云ひ觸らすのも無理はなかつた。殊にその鏡の裏に鴛鴦が彫つてあつたと云ふことも、この場合には何かの意味ありけにも思はれた。

冬坡は一應の取調べを受けただけで済んだが、土地にも居難くなつたとみえて、五里ほど距れてゐる隣の町へ引越してしまつたが、其後別に變つたことも無いやうに聞いてゐる。